公爵家の商人令嬢は知識チートで異世界を楽しみつくす

2

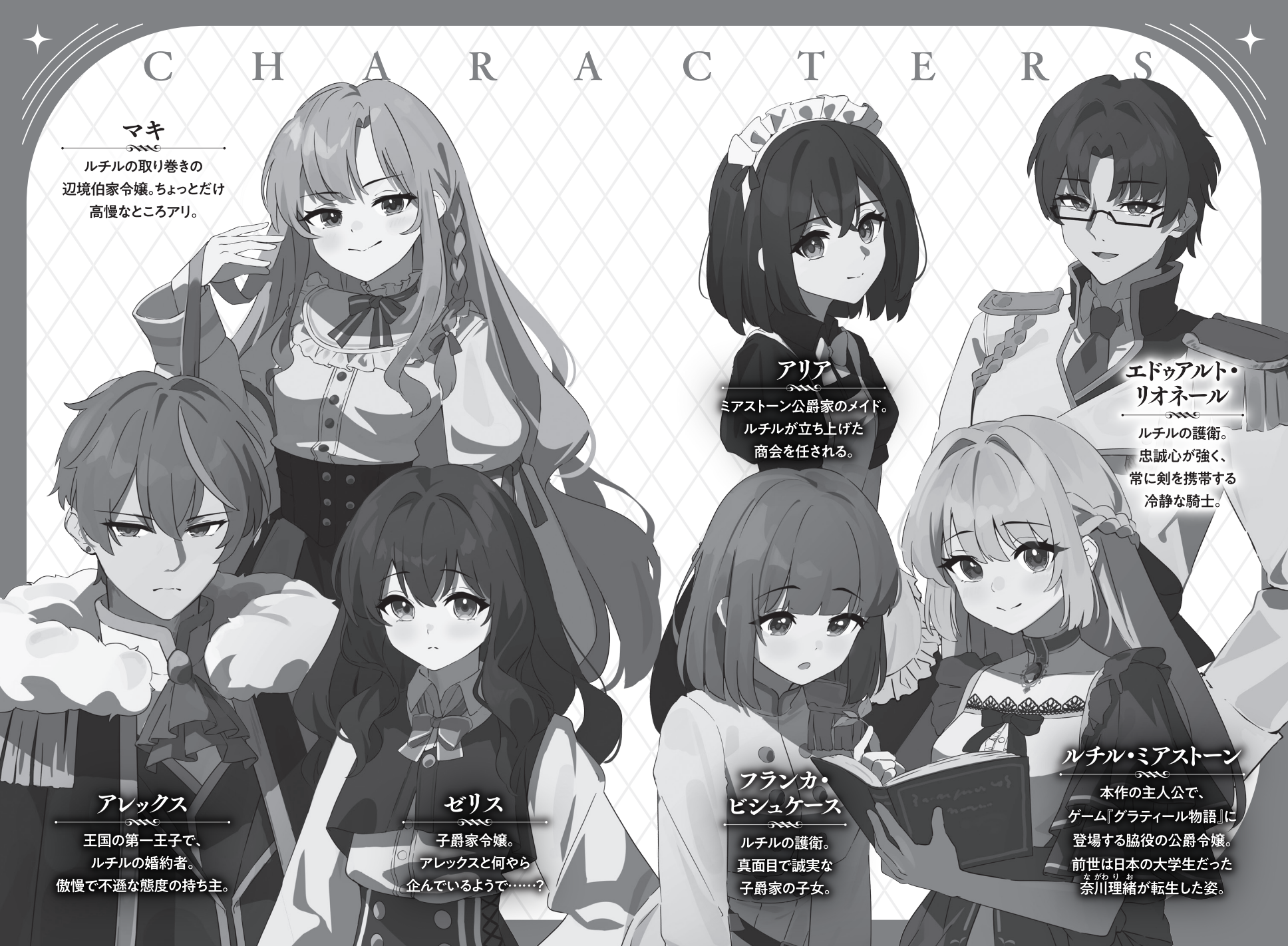
著 てるゆーぬ

画 はまなし

KOSHAKUKE NO

SHONINREIJO

CHARACTERS


マキ
ルチルの取り巻きの
辺境伯家令嬢。ちょっとだけ
高慢なところアリ。
アリア
ミアストーン公爵家のメイド。
ルチルが立ち上げた
商会を任される。
エドゥアルト・
リオネール
ルチルの護衛。
忠誠心が強く、
常に剣を携帯する
冷静な騎士。
アレックス
王国の第一王子で、
ルチルの婚約者。
傲慢で不遜な態度の持ち主。
ゼリス
子爵家令嬢。
アレックスと何やら
企んでいるようで……?
フランカ・
ビシュケース
ルチルの護衛。
真面目で誠実な
子爵家の子女。
ルチル・ミアストーン
本作の主人公で、
ゲーム『グラティール物語』に
登場する脇役の公爵令嬢。
前世は日本の大学生だった
奈川理緒(ながわりお)が転生した姿。

第1章　ゼリスとの対決

私――奈川理緒は20歳の理系大学生だったが、学校の帰り道、車にはねられ、プレイしていたファンタジーゲーム【グラティール物語】の世界に転生した。

脇役の公爵令嬢ルチルとして生き直すこととなった私は、異世界でも大学に入学。その大学で必要な単位を一気に獲得できるデュアラリー試験を突破した。

大学内での私の評判はますます高まる一方、ゲームのシナリオ上の婚約者である第一王子アレックスは現状に鬱憤をためていた。

シナリオではいずれ破局する運命だったし、私は異世界で自由に生きたい。

そんな思いとは裏腹に、子爵令嬢ゼリスがアレックスに近づき、何かが起ころうとしているようで……？

ある日。

大学内にある個室、ティールームにて。

私ことルチルと取り巻きのマキ、護衛のフランカでテーブルについて、お茶会を始めようとして

いた。
フランカが茶色の髪をかきあげながら、お茶を淹(い)れる。
そのときマキが、「ルチル様、折り入って、お耳に入れておきたいことがございます」と前置きしたうえで、切り出してきた。
「アレックス王子の噂(うわさ)については、ご存じでしょうか？」
「ええ。存じていますわよ」
私は答える。
フランカはその赤い瞳をマキに向けて確認した。
「……それって、殿下が子爵令嬢と懇意(こんい)になされているという噂でしょうか？」
「はい」
とマキが肯定した。
さらにマキは言ってくる。
「どうやらその噂……ただの噂ではなく、真実のようです。殿下は、子爵令嬢ゼリスと交際をしていると」
「そうみたいですわね」
「……ルチル様は、お二人のことをどう思っておられるのですか？　さすがに今回のことは、殿下の所業といえど、見過ごしていいものではないと思いますが」

見過ごしていいものではない、か。
マキの視点から見れば、そう思うだろうね。
なにしろマキは、私と王子の婚約を普通に祝福している。
私が内心、王子と破局したいなどと思っているとは、想像だにしていないのだ。
「ただの遊びでしょう？　放っておけばよろしいですわ」
私は答えた。
「ですが……」
マキは不安げな声をもらす。
「いずれ王子も、自分の過(あやま)ちに気づく日が来ますわよ」
私はそう伝えておいた。
まあ、そんな日は来ないだろうけどね……と、内心では思いながら、お茶を飲む。
「……」
そんな私の横で、やはりマキは不安そうな顔をしていた。

◇

ルチルのティールームでお茶を飲む。
一杯、茶を飲み終わってから、マキはティールームをあとにした。
外に出てから、マキは思う。
（ルチル様は、ああ言っておられましたけど……）
アレックス王子とゼリスの交際。
ルチルはそれを、取るに足らないことのように思っている様子だった。
おそらく、ルチルは、アレックスとゼリスの交際が破綻すると予想しているのだろう。
なにしろ、王族と子爵令嬢だ。身分が違いすぎる。
本気で互いを恋慕していたとしても、上手くいくことはない。
周りの者は祝福しないだろうし、女王陛下も、お認めにはならないだろう。
子爵令嬢など、正室はもちろん、側室としてすら容認されないに違いない。
「ですが……」
と、マキは焦りを感じる。
恋とは、そういう理屈を超えるパワーがあるものだ。

恋愛にはまって、正常な判断ができなくなることも多い。
また、アレックスがゼリスに惹かれすぎることで、ルチルへの情愛を失う可能性がある。
いずれ破綻する恋路だとしても、ゼリスへの未練が強すぎると、アレックスがルチルを大事にしなくなる可能性もある。
――まあ、もっとも、これは全てマキ視点からの想像である。
実際は、アレックスもルチルも、互いに愛情などなく、むしろ自分たちの婚約が破局することを願っている。
だがマキは、そんな二人の内心へは思いも至らないのであった。
「私がなんとかしなくては」
マキは意思を固める。
彼女はルチルの取り巻きである。
取り巻きとして、ルチルの利益になるように行動する義務がある。
しかし、そういう義務感をよそにおいても、ルチルのために行動したいと思っていた。
なぜなら、マキから見ても、ルチルは立派な公爵令嬢だからだ。
この数ヶ月、ルチルのそばで、ルチルを見てきたが……
ルチルは、貴族としての地位や権力をかさに着ない。
誰に対しても公平に、親しみを持って接している。

さらに能力はずば抜けており、さまざまな方面で成功を収めている。
貴族令嬢として、ルチルほど完成された女性は見たことがなかった。
王国を背負っていく、国妃にふさわしい女性は、ルチルをおいて他にいない。
マキはそう確信している。
だから、マキはルチルに敬意と忠義を捧げ、彼女のためにできることは、なんでもしたいと思っているのだった。
マキは思った。
ゼリスへ警告しに行こう。
身を引くように、忠告しよう。
そう考え、歩き出す。

ゼリスを探す。
10分ほど大学内を歩き回ると……
魔法学部棟の中庭のベンチに、ゼリスが座っていた。
本を読んでいる。
マキは声をかけた。
「ゼリス・キネット、ですね？」

「……はい？」
ゼリスは、顔を上げた。
マキは告げた。
「私は、辺境伯の娘、マキ・フォレステールです」
「はぁ……」
ゼリスは、本にしおりを挟んでから閉じた。
それから立ち上がって、尋ねてくる。
「お初にお目にかかります、マキ様。何の御用でしょうか？　……いえ、それ以前に、どうして私のことをご存じなのですか？」
「私は、公爵令嬢ルチル・ミアストーン様の取り巻きです」
「……！」
「あなたは最近、アレックス殿下と懇意にされておられるようですね？　もう、ここまで言えば、何が言いたいのかおわかりでしょう。――身を引きなさい。殿下は、子爵令嬢ごときが、言い寄っていい身分の方ではありませんよ」
マキはハッキリと告げた。
ゼリスは顔をしかめて、答えた。
「イヤです」

「……なんですって？」
「イヤだ、とお答えしました。なぜ、あなたに私たちの仲をとやかく言われないといけないのですか？」
マキはカッとなって言い放つ。
「口の利き方に気をつけなさい！　私は辺境伯の娘ですよ!?」
「身分をかさに着るんですか？　私は、アレックス様によくしてもらっています。あなたに圧力をかけられたと、アレックス様にお伝えしますよ？」
「なっ……」
ゼリスがアレックスを盾にして、言い負かそうとしてくる。
マキは一瞬、言いよどむ。
「いいんですか？　殿下を敵に回しても？　辺境伯は確かに立派だと思いますが、王族を敵に回してやっていけるんですか？」
ぎりっ、とマキは拳を握り締めた。
怒りの色に顔が染まる。
だが……
（身分をかさに着る……それは確かに良くない。ルチル様なら、このような物言いはしない）
ロクに理解せず、身分という名の威光を振りかざすのは、美しくない行為だ。

マキは深呼吸を一つする。
それから、落ち着きを取り戻して言った。
「とにかく、交際に関しては、立場をわきまえてください。釣り合わない恋路など、王子にもルチル様にも、多大な迷惑をかけるだけですから」
言うべきことは言ったとばかりに、マキは立ち去ろうとする。
その背中に、ゼリスは告げる。
「私は、アレックス様を本気でお慕いしています。誰がなんと言おうと、気持ちを変えることはありません」
マキは立ち止まる。
肩越しに振り返り、静かに告げた。
「……それがあなたの破滅につながらないと良いですね？」
皮肉まじりに言ってから、真剣な声で、マキは続けた。
「私はルチル様を敬愛しています。もしもルチル様を悲しませるようなことがあれば……家の威光を借りてでも、あなたを潰す。それだけは覚えておいてください」
そして、今度こそマキは立ち去った。

◇

月日は流れる。
6月。
大学では【総合力考査】がおこなわれることになった。
ダイラス魔法大学では、期末試験の結果だけで、成績が決まるわけではない。
救済として、成績を補填してくれる試験が存在する。
それが【総合力考査】であった。
この試験で好成績を修めれば、単位が7個獲得できる。
単位数が危ない学生に対する、まさしく救済の試験である。
（まあ、中間考査みたいな名前をした、実質的な実テなんだけどね）
と、私――ルチルは思った。
【総合力考査】は、筆記試験、魔法試験、剣術試験の三種類でおこなわれる。
私は、この試験において、筆記試験・剣術試験の両方で首位を取った。
このことは、やはり、すぐに学内に広まった。
「おい、聞いたか。またルチル様が1位を取ったんだってよ」
「しかも今回は、筆記だけじゃなく剣術も、だってな」
「さすがルチル様ですわね」

賞賛の声が上がる。
自分の噂が広がるのは、むずがゆい思いもあるが……
貴族たるもの、堂々としていなければいけない。

◇

翌日。
くだんのアレックスは、中庭で、ゼリスと並んで座っていた。
いつもはゼリスの前ではご機嫌なアレックスだが……
この日は、機嫌が悪かった。
「またルチルの噂か」
アレックスはため息をつく。
ルチルが筆記で1位だったこと。
そして今回、剣術においても首位だったこと。
もはや学内の貴族コミュニティは、ルチルの話題で持ちきりだ。
稀代の貴族令嬢として、みんなが褒めそやしている。
ゼリスは言った。

「またルチル様は、アレックス様を差し置いて……本当に目立ちたがり屋で、身勝手な人ですね！」
「ああ。あいつはそういう女だ」
アレックスは微笑する。
ゼリスだけは、アレックスの味方でいるからだ。
そのとき、ゼリスが言った。
「でも、おかしくないですか？」
「ん、何がだ？」
「毎回毎回、ルチル様が1位だなんて。しかも剣術まで1位なんて、絶対おかしいですよ。不正を働いているんじゃないですか？」
「……！」
ゼリスの指摘。
アレックスも、考えたことがあった。
ルチルは天才として謳われているが、本当に実力があるのか？
実は、才能など存在せず、すべて上手に虚飾しているだけではないかと。
たとえば試験で1位を取るなら、試験官を買収すればよい。
ルチル商会の経営だって、アイディアと人材を他人任せにすれば、上手くいく。
ルチルの実家――ミアストーン公爵家の力を借りれば、ルチル自身が優秀でなくても、成功を演

出することは可能だ。
（ゼリスの言う通り、ルチルは、周囲を欺いているのではないか？）
はじめは小さかった疑念が、アレックスの中でどんどん膨れ上がっていく。
「そういえば剣術試験は……個室でおこなわれていたな」
そう。
剣術試験は、一人ずつ、個室を使っておこなわれた。
多くのギャラリーのもとでおこなったものではない。
そこにいたのは、自身と、試験官と、審査員だけ。
つまり試験官と審査員を買収すれば、成績とは関係なく1位は取れる。
ルチルは、そのようにして剣術試験1位の座を買ったのではないか？
（……そうだ。そうに違いない）
ルチルは、公爵家のコネや財力を存分に利用して、嘘と虚飾によって、今の地位を築いているんだ……！
間違いない！
「私に良い考えがあります！」
と、突然ゼリスが言った。
アレックスは思考を打ち切って、尋ねた。

「……ん？　なんだ？」
「私が、ルチル様と一騎打ちの勝負をすればいいんです！」
「一騎打ち、だと？」
「はい。実は私、剣術試験は12位だったんですよね。私の実力ならば、ルチル様を一対一で討ち取れるはずです。それを公衆の面前で披露しましょう！」
「闘技場を使っての決闘をする、ということか？」
「その通りです！」
なるほど。
悪くない。
剣術試験12位のゼリスが、1位のルチルを打ち破れば、ルチルの実力不足が公に知れ渡ることだろう。
（しかし公爵家の英才教育を受けているルチルに、ゼリスが勝てるか？）
アレックスは少し心配になった。
アレックスも、ルチルの1位はさすがに不正だとは思う。
しかし、ルチルがどうしようもないほどの雑魚とまでは思っていなかった。
なにしろ、将軍であり軍司令官であるルーガ公爵の、軍事教練を受けているのだ。
それなりには強いはずだろう。

不安がるアレックスに、ゼリスが訴えかける。
「大丈夫です、アレックス様。私を信じてください！」
「ゼリス……」
「私が、ルチル様の不正を暴き、アレックス様のお気持ちを晴らしてみせます」
「……」
そうだ。
自分がゼリスを信じなくてどうするんだ？
ゼリスはこんなふうに、自分のことを想ってくれているというのに！
（それに、ルチルの適性職は【錬金術師】だ。【剣術家】のゼリスが負けるわけがない）
勝算は十分にある。
ふふ。
ふはははは。
勝てる！
ルチルに一泡吹かせられるぞ！
ルチルが無様に這いつくばって、笑いものにされるさまを想像し、思わず笑みがこぼれそうになった。
アレックスは顔を引き締め、ゼリスに言った。

「ああ。頼む、私の愛しいゼリス。どうかあの悪女の不正を、暴き立ててくれ！」
「はい。殿下に誓います！」
ゼリスは力強く、そう宣言した。

◇

翌日。
私――ルチルは、エドゥアルトと二人で大学構内を歩いていた。
エドゥアルトの黒髪と青黒い瞳が、さわやかな陽日に照らされ、潤うように輝いている。
エドゥアルトは告げた。
「筆記試験、剣術試験における首位、おめでとうございます」
「ありがとうございます」
と、私は答えた。
「両方で1位を取るなんて、さすがはルチル様ですね。専属騎士として、鼻が高いです」
エドゥアルトは、心から尊敬しているといった様子で、賞賛してくる。
「剣術試験については、運が良かったですわ。次も好順位を取れるように、精進しなければ」
「私も、ルチル様に負けないよう、努力いたします」

「ええ、頑張ってくださいまし」
と。
そこまで言ったところで。
私の行く手をふさぐ者がいた。
「あの？　……ルチル・ミアストーン様ですね？」
彼女は……ゼリスだ。
遠巻きに顔を見たことがあるから覚えていた。
直接話すのは、これが初めてである。
私は答えた。
「ええ、私は確かにミアストーン家のルチルですが」
「私は、ゼリス・キネットと申します。突然ですが、あなたに、申し伝えたいことがあります」
「何ですの？」
問いかけると、ゼリスは、何かを投げつけてきた。
その何かは、私に当たったあと、地面にぽとりと落ちる。
私は、目を見開いた。
彼女が、投げつけてきたのは――手袋。
決闘を申し込むためのグローブであった。

「あなたに決闘を挑みます。私と、一対一の勝負をしてください！」
毅然と言い放ってきたゼリス。
周囲にいた者たちが、こちらを振り返る。
ざわめきが広がった。
エドウアルトも、驚きに、目を見開いていた。
まさか……私に決闘を挑んでくるとは。
まったく予想斜め上の行動である。
（いったい何を考えているのかしら？）
と、私は困惑する。
私は尋ねた。
「決闘ということは、わたくしに要求したいことがおありということですわね？」
「はい。アレックス王子に、謝罪していただきたいと思います」
「……謝罪？」
「それから、あなたがおこなった不正についても、罪を告白し、懺悔してください！」
……？？？？
私はきょとんとする。
謝罪？

不正？
何を言っているのだ、この人は。
とりあえず、一つ一つ確認していこう。
「あの……わたくしは殿下に何を謝罪すればよろしいのかしら？」
「決まっています。あなたが普段から、殿下より目立ち、殿下の面目を潰してしまっていることです。そのことで、殿下はとても窮屈な思いをしておられます！」
……ふむ。
なるほど。
まあ、意図的に面目を潰してやろうと思ったこともあるからね。
入学試験のときとかさ。
だが、正直にそれを言うつもりはない。
私は、素知らぬ顔で告げた。
「なるほど。殿下にそのような負担をかけていたとは、存じ上げませんでしたわ」
「なっ……白々しいことを！」
と、責められた。
私は言う。
「殿下に肩身の狭い思いをさせてしまったことは、反省いたしましょう。……で、次の質問ですが、

私がおこなった不正とは何のことですの？　思い当たる記憶がないのですが」
「とぼけないでください！　あなたは剣術試験において、試験官たちに賄賂（わいろ）を渡し、1位の座を買収したのでしょう!?」
なっ……
何を言い出すんだ？
そんなことはしていない。
悪質なデマである。
私は困惑のあまり、取り乱しそうになったが……
努めて冷静に、答えた。
「買収などしていませんわ」
「嘘です！」
「嘘ではありませんわよ。だいたい公衆の面前で、そのような言いがかりをつけるなど……証拠があってのことなんでしょうね？」
「しょ、証拠は……ありませんが」
と、ゼリスが気勢をそがれたように答える。
私は呆れて苦笑した。
遠巻きに話を聞いていたギャラリーたちからも、失笑が漏れる。

「証拠もナシに疑ってたの？」
「何考えてるんだ」
「つーか、あいつ、誰？」
「子爵令嬢よ。ほら、王子の遊び相手の」
「相手はルチル様だぞ。証拠もなく糾弾するのはヤバくね？」
と、ささやき声が聞こえてくる。
証拠もないのに、公爵令嬢に嫌疑をかける……
首が飛んでもおかしくない話だ。
（というか、ウソの嫌疑をかけるにしても、証拠を捏造するぐらいのことはやるものだと思うけれど）
陰湿な者ならば、捏造した証拠を突きつけて、周囲を煽動しようとするだろう。
どうやらゼリスに、そのような知恵はない。
良くも悪くも、アレックスと同じタイプの馬鹿だな……と、私は分析した。
「証拠がないのでしたら、これで話は終わりですわね」
「しょ、証拠はありませんが、あなたの不正を暴く方法があります！」
「……どんな方法ですの？」
「まさに私との決闘ですよ！　私は剣術試験12位です。本当に実力で1位を取ったのなら、12位の

私に負けるはずがないですよね!?」
うーん。
どうだろう？
1位が12位に負けることだって、あると思う。
しかも、仮に私が負けたからって、それで不正が暴かれることにはならないだろう。
無理がある理屈だ。
「どうしたんですか？　まさか、逃げるんですか？」
と、ゼリスは不敵に笑いながら問うてきた。
冗談ではなく、本当に私に勝利すれば、不正を暴いたことになると思っているらしい。
「ゼリス様……いくらなんでも、失礼ではないでしょうか？」
と、エドゥアルトが口を挟んだ。
「ルチル様の実力は、私が保証します。このお方の強さは、騎士団員と比較しても上位に位置するものです。何度も、この目で見て参りましたから」
「あ、あなたは専属騎士ですから、ルチル様を擁護するに決まってるじゃないですか！　そんなの何の保証にもなりませんよ！」
「……まあ、それはそうかもしれませんが」
と、エドゥアルトが引き下がる。

さて……どうしたものか。
ここで勝負を逃げたら、ゼリスがかけてきた疑いに、信憑性があると、周囲に思われてしまうかもしれない。
疑いは完全に晴らしておいたほうがいいかもね。
よし。
「……わかりました。そこまでおっしゃるのでしたら、決闘を受けてさしあげますわ」
私は、そう答えながら、地面に落ちたグローブを拾い上げた。
「こちらの要求も決めておきましょう。私が勝った場合、今回の言いがかりについて、謝罪と賠償を要求させていただきますわ」
「謝罪と賠償……ですか。そんなのでいいんですね？」
「はい」
退学しろ……と要求することも考えたが。
こいつは大学に残しておいたほうが、いろいろ暴れてくれそうだし。
私とアレックスが婚約破棄するための、キーパーソンになる気がビンビンする。
ゆえに、この要求で構わない。
「では、決まりですね！」
と、ゼリスは言った。

こうして、私とゼリスの決闘が決まった。
決闘の日時は、3日後、夕刻である。
決闘の噂は、即座に大学を駆けめぐった。
いつ決闘するのか。
なぜ決闘をするのか。
互いの主張や要求はなんなのか。
そういった話が、盛んに語られた。
しかし。
当たり前といえば当たり前かもしれないが、下馬評はゼリス敗北が濃厚であった。
「まあ、どうせルチル様が勝つよな」
「逆転はないわよね」
「さすがに実力が違いすぎるよな。なんで子爵令嬢さんは、ルチル様に喧嘩売ったんだろ？」
「無謀ですよね」
「決闘、見に行くか？」
「私は見に行くつもりですわよ」
ちなみに。
ティールームでは、マキが怒り狂っていた。

「あの女……！　剣術1位のルチル様に喧嘩を売るとは、身の程知らずにも程がありますねッ！」
フランカも困惑の言葉を口にする。
「どうしてルチル様に決闘なんて……ルチル様は、不正なんてしてませんよね？」
私は弁解した。
「しているわけないでしょう。言いがかりですわ」
エドゥアルトは、私に耳打ちをしてくる。
「まさか……殿下がけしかけた可能性もあったりするのでしょうか」
エドゥアルトは、アレックスと私が険悪な仲だと知っている。
だから、そのような推測が浮かんだのであろうが……
「それはないと思いますわよ」
と、答えておいた。
アレックスは今まで、こうも直接的な行動に出たことはない。
私のことを疎ましく思っていても、大人しくしていた。
今回、ゼリスが私に決闘を申し込んできたのは、ゼリスの独断か……
あるいはゼリスの提案で、アレックスが了承した流れだろう。
「でも……ルチル様なら、勝てますよね？」
と、フランカは聞いてくる。

私は微笑みながら答えた。
「もちろんですわ。必ず勝利して、事実無根の疑いを晴らさせていただきますわよ」
ゼリスに負けるというビジョンは浮かばない。
しかし、勝負に油断は禁物だ。
一応、気を引き締めていこう。

◇

そして。
決闘当日。
私は闘技場に入場した。
観客席は満席である。
拍手と声援があちこちから飛ぶ。
闘技場は、足元が土であるグラウンド。
そのグラウンドを、段々状の観客席が囲んでいる。
円形闘技場である。
私は、グラウンドの中央まで足を進めた。

すでにゼリスが立っている。
私は、ゼリスから10メートルほど離れた位置で立ち止まった。
ゼリスは言った。
「逃げずに来たことは褒めてさしあげます！」
その物言いに、私は呆れた気持ちに包まれる。
公爵令嬢を相手に、無礼な発言の数々。
私が糾弾するだけで、退学も有り得るというのに。
審判の女性がやってきた。
「静粛にお願いします！」
と、彼女は告げた。
「これよりゼリス・キネット対ルチル・ミアストーンの決闘を始めます！」
客席から拍手や口笛が飛ぶ。
こほん、と審判はせき払いをした。
「私は、決闘の審判を務めさせていただきます、ミリェリーと言います。よろしくお願いします」
と、審判が述べた直後。
ゼリスが口を開く。
「ルチル様、まさか審判を買収したりしていませんよね？」

そんな言葉を投げかけてきた。
審判は顔をしかめて、言った。
「私は公平ですし、買収などされておりません。ゼリス嬢、失礼な物言いは謹(つつし)んでいただきたい！」
「どうだか。買収されていたら、不公平なジャッジをされるかもしれませんし、心配です」
と、ゼリスは嫌味な口調で言った。
私はため息をついてから、告げる。
「安心しなさいな」
そして続けて、言った。
「審判の判定などなくとも、誰が見ても明らかなぐらい、完璧な勝利をお見せしてご覧に入れますから」
「なっ！」
ゼリスが顔を怒りに染めた。
「舐めないでください！　私だって、強いですよ!?」
「そうですの？　では、頑張ってください」
「くっ……！」
ゼリスが、いらだちに歯ぎしりをする。
審判が言った。

「おしゃべりはそのあたりで。まずは、武器を提供します」
審判はアイテムバッグから、木剣を二つ取り出した。
その木剣を私とゼリスに、一つずつ手渡した。
「試合では、真剣ではなく、この木剣を使っていただきます」
と、審判が説明する。
私は木剣の握り心地を確かめた。
軽く振ってみる。
使用感は悪くない。
なんらかの魔法的な処理をほどこしているのだろう、強く握っても壊れないようにできているようだ。
「では、お二人とも、準備はよろしいですか？」
審判が聞いてくる。
私はうなずいた。
ゼリスもうなずく。
会場も静まり返っている。
そして、審判は告げた。
「それでは――はじめ！」

審判の号令とともに。
戦いの火蓋が切られた。
「いきます！」
と、ゼリスは宣言し、構える。
次の瞬間。
彼女は地を蹴って、こちらに向かって跳躍（ちょうやく）してきた。
斬りかかってくる。
「……」
私は、難なく木剣を受けた。
つばぜりあいの構図になる。
ゼリスが言い放った。
「不正で勝って威張ってるあなたに、真の強さというものを教えてさしあげます！」
私は呆れそうになる。
真の強さ、ねえ……
ゼリスって、別にめちゃくちゃ強いわけじゃない。
どう考えても「真の強さ」とやらを教えられる立場にはないだろうに。
「……」

私は、無言のまま、相手を押し返す形で、つばぜりあいを解いた。
「む……！」
ゼリスが後ろによろめき、たたらを踏む。
だが。
「ハァッ!!」
すぐさま体勢を立て直し、斬りかかってくる。
その斬撃を、私は軽くいなす。
ゼリスは果敢に何度も斬りかかってくる。
ときに魔法を放ってくることもあった。
水魔法である。
それを私は丁寧に処理する。
ゼリスは言った。
「どうしたんですか!?　守ってばかりじゃ勝てませんよ!!」
斬撃を繰り出しながら、さらに言葉を続ける。
「やっぱりあなたは、不正で勝ったんですね！　だから、反撃の手も出せないんでしょう!?」
はぁ……
勘違いもいいところだ。

お望みどおり、反撃してやろう。
「ふっ！」
「!?」
試合が始まってから、はじめて繰り出した私の斬撃。
それをゼリスは受けるが、「くっ!?」
斬撃の重さ、衝撃を殺しきれず、後退して転んだ。
尻餅をついたゼリス。
「どうしたんですの？」
と、私は問いかける。
「真の強さ、とやらを、教えてくださるのではなかったんですの？」
「……ッ!!」
ゼリスは怒りで耳まで赤くなる。
すぐさま立ち上がって、叫んだ。
「舐めるなァッ!!」
斬りかかってくる。
あまりにヌルい斬撃だ。
もともとゼリスの攻撃は、大した攻撃ではない。

その攻撃が、怒りに我を忘れたせいで、さらに雑になっている。
ここまでキレを失った斬撃なんて、恐るるに足りない。
私は、
「ふっ!!」
と、呼気を込めた斬撃を放つ。
ゼリスの斬撃と、私の斬撃がぶつかり――
「きゃあっ!?」
私の斬撃が、ゼリスの斬撃ごと彼女を吹っ飛ばした。
ゼリスが地面に転ぶ。その眼前に、木剣の切っ先を向ける。
「決着ですわね」
私はそう告げた。
ゼリスは目を見開き、私のことを見上げていた。
木剣を突きつけられたゼリス。
誰が見ても明らかな決着――
だったはずだが。
「まだです！」
「!?」

ゼリスは、なんと、自身の木剣で、私の木剣を振り払ってきた。
立ち上がったゼリスは、私に斬りかかってくる。
私は困惑しながら告げる。
「は？　ちょっと、あなたっ!?」
「まだ終わってないです！」
いや、終わりでしょう!?
そう叫びたくなった。
観客も困惑の声を漏らしている。
私は審判に視線を送って、呼びかける。
「審判！」
「……！　ゼ、ゼリス嬢、剣を収めなさい！　もう勝負はつきました！」
「まだです！　見ての通り、私はまだ戦えます！」
「いいえ。戦えるかどうかではありません。切っ先を向けられた時点で、あなたの負けです！」
「……やっぱり、審判は買収されていたんですね!?」
ゼリスが私に斬りかかるのを止めて、審判に言い放った。
審判もさすがに困惑の声をもらす。
「は？」

「だって、私はまだ戦えるのに、敗北の判定を下そうとして……おかしいじゃないですか！」
いや、おかしいのはゼリスのほうだ。
ゼリスは、どうやら、決闘の作法を知らないようだ。
別に戦闘不能にならなくても、顔や首などに切っ先を向けられたら、敗北が確定する。
貴族ならば常識のことであるはずだが……
ちなみに闘技場のグラウンドには、【拡声の魔石】が配置されており、私たちの声や戦闘音は、観客たちにもしっかり聞こえている。
本来、観客たちに聞かせるのは、決闘した戦士同士が、互いの健闘をたたえあう凛（りん）とした口上であるべきだが……
今回は、ゼリスの異常な言動が、観客たちに伝わってしまっていた。
「あいつ、おかしいよな」
「めちゃくちゃなこと言ってね？」
「どう見てもゼリスの負けよね。なんでまだ戦ってるの？」
「子爵令嬢の分際で、無礼な言動の数々……！　ルチル様はもっと強く注意なさるべきですわ！」
「やべー女だな、あのゼリスってやつ」
「審判もさすがに困惑してるな」
観客たちがざわざわと、不満や困惑の言葉を口にしている。

いますぐにでも、ゼリスへの盛大なブーイングに変わりそうなほどだ。
だがゼリスは、戦いを続行する気満々である。
頭に血がのぼっているのか、周囲の声なんて聞こえていないようだ。
「買収された審判の判定なんて、聞く意味がありません！　だから決闘は続けます！」
と、ゼリスが主張し続けている。
そして私に斬りかかってきた。
私は、ため息をついた。
ゼリスの斬撃が迫る。
「えっ⁉」
しかし、私はゼリスの攻撃を難なく回避する。
すかさず彼女の首元に木剣を突きつけた。
「少し落ち着いたらどうですの？」
「〜〜〜ッ‼」
明らかに勝負はついている。
なのに、ゼリスは私の剣を振り払い、ふたたび斬りかかってくる。
「まだ終わっていません‼」
ゼリスが叫ぶ。

完全に周りが見えていない。
また斬りかかってくる。
空振る。
そこに、私は足を出して、引っかけた。
ゼリスは思いきり足をすくわれ、地面にすっ転ぶ。
「ぐぶっ!!」
起き上がろうとするゼリスの顔の横に、切っ先を突きつける。
私は宣言した。
「わたくしの勝ちですわ」
「くっ！！！」
「いい加減になさい。もう勝負はついて――」
「黙って!!」
私の言葉をさえぎって、ゼリスは立ち上がり、ふたたび斬りかかってきた。
ゼリスの斬撃。
空振る。
空振る。
空振る。

三連続で空振る。
四度目の斬撃。
その芯をとらえるように、私はキレのある斬撃を放つ。
「きゃあっ!?」
ゼリスが吹っ飛ばされて、転んだ。
そこに、私はやはり、切っ先を突きつける。
観客たちがざわめく。
「これもうルチル様の勝ちだろ」
「なんで審判はジャッジしないんだ？」
「ゼリス、ダッセ」
「見苦しいにも程がありますわ」
「結局、ルチル様が順当に強かっただけですわね」
「むしろ、ゼリスさんの剣術12位というのが、信じられなくなってきました。彼女のほうが不正なんじゃないかしら？」
「ルチル様に不正なんてなかったな」
「当然だろ。ルチル様がめちゃくちゃ強いのは、剣術学部生ならみんな知ってる」
「相手は軍司令官のご令嬢だぞ。子爵令嬢ごときが勝てるわけねーんだよ」

観客のざわめきを聞いている限り、ゼリスの味方はいない。
私が公爵令嬢だから、おいそれと悪口をいえないということもあるだろうが……
それ以上に、ゼリスの言動や態度がひどすぎた。
証拠もなく言いがかりをつけてきたり――
あきらかに負けているのに、敗北を認めず、決闘を続行しようとしてきたり――
審判に対してまで買収の疑惑をぶつけたり――
やりたい放題である。
だから、純粋に観客たちも、ゼリスの振る舞いを不快に思っていたのだろう。
誰もが、見るに堪えない、といった様子で、ゼリスの行動を眺めていた。
「まだァ!!」
と、ゼリスがやけくそ気味に斬りかかってくる。
「ふっ!!」
最後に、トドメの一撃を放つ。
その一撃が、ゼリスの木剣を跳ね飛ばした。
「あっ!?」
木剣を失ったゼリスが、途方に暮れる。
私は、その首筋に向けて、木剣を突きつける。

「もう十分でしょう」
「……っ」
ゼリスは、その場にくずおれた。
力なく座り込む。
私は審判に視線を送った。
「審判」
「は、はい！　決闘は、ルチル・ミアストーンの勝利です！」
審判が宣言する。
観客たちが一斉に拍手をした。
ついでにゼリスに対するヤジが飛ぶ。
「当たり前だー！」
「ゼリス弱すぎ」
「身の程をわきまえろよ、子爵令嬢！」
「剣術もそうですが、まず礼儀というものから学びなおしたらどうですか？」
「二度と言いがかりつけんなよ、ワガママ女！」
「きゃー！　ルチル様ー！　素敵ですー!!」
それらの声が届いているのか、いないのか。

ゼリスはただ、悔しそうにうつむいている。
……と。
そのときだった。
「観客はいい加減にしろ！」
怒号が飛んだ。
聞き覚えのある声。
その声の主が、闘技場の入場口から現れる。
アレックスだった。
観客たちは静まり返る。
アレックスは、悠々と闘技場のグラウンドに現れて、言った。
「見ていたぞ。ルチル」
「……何をでしょう？」
「決闘で、貴様がゼリスをボコボコに叩きのめしたところをだ」
ボコボコに……か。
まあ、否定はしない。
でも、勝負を無駄に続行させまくったのはゼリスのほうだ。
私ばかり責められても困る。

だが。
「貴様は、悪女だ」
と、アレックスは断定するように言った。
「ゼリスは、私のために戦ってくれたのだ。そんな彼女の優しい想いを踏みにじる貴様は、最低のクズだ。貴様には、ゼリスの美しい心が見えなかったのか？」
いや……
あれが美しかっただろうか？
はなはだ疑問である。
「そ、そうです！」
と、ゼリスがアレックスに同調した。
ゼリスは言った。
「ルチル様はひどい人です！　アレックス様の苦しみを理解せず、自分勝手に振る舞って！　あなたには人の気持ちがわからないんです！」
はぁ……
頭が痛くなってくるな。
私は反論する気も失せて、ため息をつく。
しかし、一つわかったことがある。

なぜアレックスとゼリスが、惹かれあったのか……ということだ。
きっと、バカ同士、波長が合ったのだろう。
私は、そう確信した。
「聞け！　観客ども！」
と、アレックスは観客に向かって言い放った。
その声は、闘技場に配置された【拡声の魔石】によって、場内全体に広がる。
「ゼリスは正々堂々、ルチルと戦った！　敗北したとはいえ、何度も果敢に立ち向かった姿は、美しく、尊いものだっただろう！」
ものは言いよう、とは、このことである。
実際は、ゼリスの行為を、見苦しいと思った観客も多いと思うが……
「そんなゼリスに罵声を浴びせるなど、騎士道に反すると知れ！」
アレックスはそう訴える。
そして、こんなことを言い出した。
「私の言葉を理解し、正しいと思った者は、ただちに拍手をせよ！　さあ、いますぐ！」
観客がどよめく。
困惑の波が広がる。
拍手をする者はいない。

アレックスは舌打ちをした。
「無礼者どもが。騎士道を知らぬ愚者ども。恥を知れ!!」
そう観客に向かって吐き捨てて、アレックスはゼリスを抱え起こした。
「ゼリス、大丈夫か？」
「はい。アレックス様」
「帰ろう。こんなところにいては、心がゆがむ」
「はい！」
と、二人だけの空間に入って、帰り始めた。
私はその背中を呆れ果てて見つめる。
観客たちの反応は冷え冷えである。
「なんだよ、あの王子？」
「意味わかんねえ」
「あたしたちが悪いって言いたいの？」
「ルチル様に言いがかりをつけてたのはゼリスのほうなのに」
「ゼリスは戦いぶりもひどかったよな。明らかに負けてたのに、何度もごねてさ」
「アレックス王子は、あんなメチャクチャな戦いを肯定してるんですの？」
「ルチル様もお怒りになっていいんじゃないの？　さすがにこれは、ひどいと思うわ」

「王子もゼリスも、ヤバイやつだったな」
当然といえば当然かもしれないが、非難轟々である。
まあ、とりあえず、決闘は終了した。
私もなんだか疲れちゃったので、ティールームにでも戻って、ひと休みすることにしよう。

今回の決闘については、後日、瞬く間に大学中に広まった。
もちろん、決闘の結果は周知されていったが……
それ以上に、アレックスとゼリスの言動のひどさが、話題となった。
「ゼリスもひどかったけど、殿下もひどかったな」
「私……殿下があんな無茶なかばい方をするとは思わなかったわ」
「まるでルチル様や、観客が悪いみたいな言い草でしたわよね」
「ああ。どう見たってゼリスが一番悪いだろ」
「結局、ルチル様への言いがかりの件、謝罪もしなかったよな」
「まあ、ある意味でゼリスと殿下は、お似合いのカップルではないですか？」
「ルチル様がかわいそうだ」
ほとんどの内容が、アレックスとゼリスに対する不満や陰口である。
アレックスが最後に、観客を叱責したことに関しては、特に不評であった。

立ち読みサンプル
はここまで

そんな学内の雰囲気を感じつつ。
私は、マキと、フランカと、エドゥアルトと、四人でティールームにいた。
お茶を飲む。
エドゥアルトが言った。
「学内は、ルチル様の決闘のことで持ちきりですね」
フランカが応じる。
「ほとんどの人が、殿下たちへの不満を述べている感じですよね」
マキがふん、と鼻を鳴らして言った。
「当然です！　ルチル様は完全な被害者ですし、悪いのはあの女なのですから！」
あの女、とはもちろんゼリスのことである。
マキが続ける。
「でも幸いなことに、ゼリスはルチル様の足元にも及びません。剣の腕が立ったり、頭が回ったりするわけでもない、ただのバカですからね！」
……本当に言いたい放題だね、マキは。
よほどゼリスのことを嫌っているようだ。
と、そのときだった。
ティールームの入り口の扉が、トントンと叩かれる。